

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

## 主 論 文 の 要 旨

論文題目

日中大衆化社会と〈事件の物語〉  
——「松本清張ブーム」の比較文化論

氏 名

尹 芷 汐 (イン シセキ)

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、日本と中国、及び東アジア各地で起きた「松本清張ブーム」という現象に着目し、それを取り巻く文化的構造を解明するものである。

先行研究のほとんどは、松本清張の作品をはじめとした「社会派ミステリー」がいかにか社会を「反映」しているかを論じることによって、「松本清張ブーム」の要因を説明しようとしてきた。それに対して、本論文は社会を表象する際に「事件」を物語る意味を検証するために、「社会派ミステリー」という名称を保留し、〈事件の物語〉という概念を用いた。

具体的には二つの問題を提起している。まず、戦後日本の社会的秩序が再編成される中で、「事件」がいかにか報道・文学・映像を通じて様々な「物語」として展開し、社会の「常識」を身につける手段となっていたのか。それから、戦後日中間の文化的交渉において、日中知識人・文学者がどのように〈事件の物語〉(とりわけ政治的事件)を通じて「東アジア」の問題を共有し、「日中友好」のナラティブを構築していったのか。

本論文は二部に分け、以上二つの問題を解明しながら、改めて松本清張や森村誠一の作品が担った役割を明らかにし、「松本清張ブーム」の意味を考えていく。

第一部は、松本清張の事例をいくつか取り上げて分析しながら、転換期の日本における〈事件の物語〉の役割を考察する。文学・映画とジャーナリズムを比較しながら、〈事件〉を語る言説の生産・流通・受容といったプロセスを考察し、同時代日本の文化空間に内包された様々な力学を明らかにする。

第一章は、『週刊朝日』とそこに連載された小説『黒い画集』シリーズを通して、一九五〇年代に週刊誌というメディアがもたらした同時代の「知」の変容に、松本清張の小説がどう関わっていたかを検証する。この時代には、実在の社会的事件をめぐって、新聞報道・週刊誌の解説・小説が複数の物語を展開することはよくあったが、読者も週刊誌の読書行為を通じて同時代社会に関する常識的な「知」を獲得しながら、

投書欄や日常の会話の中で自ら情報提供・思考・議論を行い、雑誌と小説の作り方に影響を与えていた。こうした関係性を整理しながら、松本清張が書いた〈事件の物語〉の位置づけを考えていく。

第二章は松本清張の小説「遭難」を井上靖『氷壁』をとりあげる。いずれの作品も一九五〇年代後半の「登山ブーム」「遭難ブーム」を背景に書かれたものである。だが、井上靖の『氷壁』が「ナイロンザイル事件」をもとに聖なる登山者の物語を描いたのと対照的で、清張の「遭難」は「山の事故」を「殺人事件」に仕立てている。二つのテキストと同時代の新聞・雑誌の語り方と対比することを通じて、〈事件の物語〉と世論との関係を解明してゆく。

第三章は『日本の黒い霧』という占領期の未解決事件を書いたノンフィクション・シリーズを考察の対象とする。当時、総合雑誌や週刊誌の中で「内幕もの」というタイプのルポルタージュが流行していたが、それは情報が閉ざされる時代が長く続き、事件の「裏」や権力層の「内幕」を知りたい欲望が高まっていたからである。この章は、『日本の黒い霧』が用いた事件解決の方法の独自性を解明し、作品が一九六〇年に書かれたことの意味を探りたい。

第四章は、松本清張の作品が一九五七年から盛んに映画化・ドラマ化されるようになったことについて、当時の映像メディアの戦略や日常生活との関連から見通してみよう。また、『顔』『あるサラリーマンの証言』などの作品をあげながら、一つの事件は週刊誌・映画・テレビなど複数のメディアにおいて具体的にどのように物語として展開していくか、その物語をめぐって作者と読者・観客、メディアの間でどのような関係性が生じているかを分析する。

第二部は、戦後日中間の文化的交渉における〈事件の物語〉の役割を検証する。具体的には、まず日中文化人ネットワーク、日本文学・映像の翻訳を取り巻くメディア状況、「日中友好」のナラティブ、という三つのキーワードから時代の文脈を解明する。その上で、作品を具体的にとりあげながら、〈事件の物語〉がいかに「日中友好」というナラティブの形成に関わったのか、また、そうした「日中友好」のナラティブによって、「日本」「東アジア」に対する大衆のイメージがどのように生成したのかを分析してゆく。

第五章は、戦後日中間文化人ネットワークを整理しながら、中国の日本文学翻訳・出版体制、とりわけ「内部出版」から「公開出版」への展開と連続性を記述する。そうした全体図を概観しながら、〈事件の物語〉が戦後中国で翻訳された日本文学の主流になったことの意味を考える。

第六章は、一九八二年の中日作家座談会の記録と鄧友梅『さよなら瀬戸内海』、森村誠一『新・人間の証明』という三つのテキストを読解する。戦後日中文学者ネットワークにおいて語られ続けてきた「日中友好」という言葉を再検討しつつ、作家たちは

いかに〈個人的経験〉としての「事件」を語ることによって、戦争の「裏面」を言語化し、そこから「日中友好」というテーマを戦略的に導き出していったかを分析する。

第七章は、松本清張の『日本の黒い霧』が中国に紹介・翻訳された経緯を明らかにした上で、一九六五年版の中国語訳に施された自己検閲を問題にする。「事件」を通して「朝鮮戦争」を書くこのテキストは、中国のメディア報道とどのような共通点と相違点があるかを分析し、冷戦体制下の文学と政治との緊張関係を探る。

第八章は、一九八〇年代の中国で広がった「法制文学」と、「社会派推理小説」とよばれている松本清張の小説とを比較している。「社会派推理小説」に従来探偵小説の主役である名探偵が警察・記者に変わったが、それは市民社会の形成の現れであると考ええる。「名探偵の死」を宣告したそれらの作品が中国で翻訳され、「法制文学」の参考とされたが、その時は国家の機関である警察のイメージを向上させるものとして捉えられることもあった。こうした流れを整理していくと、〈事件の物語〉の両義性が浮き彫りになってくるはずである。

第九章は、森村誠一原作の映画『人間の証明』とテーマソング「人間の証明テーマ」、及びもとになる西条八十の詩「ぼくの帽子」を分析した上で、それらの中国語訳と比較する。複層的な翻訳過程において、「日本的郷愁」がいかに創造され、幻滅し、反覆するかを検証する。また、そうした表象を作品の観られる社会的文脈に置き直しながら、作品に書かれた「事件」の意味を考えたい。

第一〇章は、一九八〇年代の「連環画」という中国のコミックブックに日本文学・映画、とりわけ「事件」を物語にしたものが多いことを問題にした。連環画という大衆的な書物にとって〈事件の物語〉はどんな有効性があるかを考察した上で、映画『砂の器』の連環画を取り上げ、メディアの物質的な特徴・流通と享受の形態から、物語内容がどのように規定されるかを具体的に分析する。

以上のアプローチによって、「事件」が様々な「物語」として生産され、それぞれの社会に対する大衆の「知」を構築しながら、「日本」と「中国」という他者のイメージを作り上げていく過程が明らかになってくるだろう。同時に、「日中友好」というナラティブを通して、戦後東アジアの文化的秩序がどのように欲望され、再編成されようとしたのかも浮き彫りになってくると考える。